

美から社会を学ぶ／社会から美を学ぶ

— 美と社会の総合学習 —

岡 崎 宏 樹

はじめに

美的なものと社会的なものは深いところでつながっている。美術家やその作品が社会の影響を受けているというだけではない。芸術が社会に政治的影響力を及ぼしようというだけでもない。ある意味で、社会の形成は美の創造なのである。例えば、異なる立場の人びとが個別の利害を超えて協働するとき、共生の可能性を実現するとき、その協働や共生を人は美しいと感じる。「良き社会」の創造は美の観念をともなう。あるいは、美は社会形成を促進するともいえる。というのも、美の価値を尊重するとき、人は「役に立つ」という生活の直接的な要求から離れ、純粋な共感と交流の場に身を置くことができるからだ。そこには美を媒介として「良き社会」の理想が立ちあがる。それは夢のようにほかないものかもしれないが、美しい理想なくして社会の創造もまたない⁽¹⁾。

京都学園大学人間文化学部の国際ヒューマン・コミュニケーション学科で開講されている「アートギャラリー実習」は、このような美と社会の関連性をふまえ、美から社会を学ぶとともに社会から美を学ぶことをめざした体験型の総合学習である。本稿では、2010年度の授業の取り組みを紹介し、この新しい学習の可能性と課題を考察することにしたい⁽²⁾。

1. 「アートギャラリー実習」のねらい ― 美と社会の学び

2010年度秋学期の「アートギャラリー実習」は、社会学を専門とする岡崎宏樹と美術家の藤阪新吾が共同で担当した。藤阪講師は美術家であるが、小学校の美術教員でもあり、また社会学の修士号を取得し、社会美学にかんする研究を続けている⁽³⁾。一方、岡崎は社会学者であるが、20年以上にわたって音楽の創作・演奏活動を続けており、大学でも音楽文化を主題とした授業を担当している⁽⁴⁾。この授業は、共に関心を美と社会の交わる場へと向ける社会学者と美術家の協働である。

「アートギャラリー実習」(I/II)は、全回生を対象とした半期の実習科目である。2009年に国際ヒューマン・コミュニケーション学科の開設にさいして設置された科目であるが、人間文化学部の学生ならば誰でも履修することができる。人間文化学部は、心理学、社会学、メディア学、歴史学、民俗学、日本文化、国際文化、語学など、いわゆる文学部系の学問を学ぶ学部だが、美術系大学のように美術を専攻する学生は在籍していない。しかし美術専攻でない「普通の学生」の教育こそがこの授業の目的である。

ドイツの美術家で、教育者、社会活動家でもあったヨーゼフ・ボイス [1921-86] は「人間は誰でも芸術家である」という言葉を遺している。ボイスによれば、芸術は芸術家だけの活動ではない。美的な秩序をもった芸術作品の創造と協働による社会秩序の創造は密接な関係にある。人が主体性と創造性を発揮して社会を形成することをボイスは「社会彫刻」と呼び、みずからは教育・政治活動・環境運動においてこれを実践した。「アートギャラリー実習」は、ボイスのようにシュタイナーの人智学を思想背景にもつものではないが、「社会彫刻」の発想とは響きあうところがある。この授業のねらいは、美の社会性と社会の美的性質を体験的に学んで、創造力とコミュニケーション力を培うことにあるからである。

「アートギャラリー実習」は、展覧会の開催を目標とした創作と協働を

その中心に置いている。準備のために地域のフィールドワークやゲストに招いた現場学習も実施している。創作は展覧会の「場所」から発想することを基本方針とし、創作・展示のプランについて対話と議論を重ねて完成をめざしている。2010年度の展覧会は3日間(12月17日～19日)。初日はレセプション・パーティ、2日目はテーマに関連した公開講演会⁽⁵⁾が開かれ、3日目は展覧会のみが開催された。会期には延べ90名近い来場者があり、その様子は『京都新聞』でも紹介された⁽⁶⁾。

2. 場所から学ぶ ― 亀岡商工会館の場合

これまでの授業では京都市内のレンタルギャラリーを借りて展覧会を開催していた。しかし、2010年度秋学期の授業は、創作と協働を社会的な実践へと近づけるため、ふだんはギャラリーとして使われていない古い建物で展覧会を開催するという方法を選んだ。この選択は授業運営にかなりの負担となったが、一方で、大きな教育成果をもたらすことにもなった。

会場に選んだのは、大学の最寄駅、JR 亀岡駅から歩いて5分のところ、保津川下りの乗船所近くにある亀岡商工会館という建物である(写真1)。亀岡商工会館は10年ほど前まで亀岡商工会議所が事務所として使っていた鉄筋4階建ての建物であるが、1999年に事務所が移転して以降は複数の団体に貸し出されていた。それらの団体も建物の老朽化が進んでいることから他所への移転を進めており、大半の部屋が未使用となっていた。建物は、保津川下りでたくさんの観光客が訪れる特別な土地に所在しながらも、うす汚れて、まるで打ち捨てられたような状態であった。

この亀岡商工会館で展覧会を開くことを提案したのは藤阪講師であった。藤阪講師は今年度の授業を担当するにあたって、大学の所在する亀岡市内を丹念にフィールドワークしたうえで、この建物を「直観的に」選んだという。その直観をあえて翻訳するなら、選択の理由は「場所の力」にあったといえるだろう。私たちは、大学の所在する亀岡の「地域性」が凝縮し



写真1 亀岡商工会館の外観（撮影：岡崎宏樹）

た場所でアートを実践することを検討していた。重要なのは、その場所が人気の観光スポットや有名な建物であることではなく、地域の歴史性や物語性が集約されていることであった。すでに明確な意義や解釈が与えられた場所ではなく、私たち自身が主体的に関わることでその意義を発見

できるような場所、解釈の余地があり、意味が隠されている場所が望ましかった。藤阪講師は、亀岡商工会館がまさしくそのような場所であるということを芸術家の直観で把握し、ここを選択したのだと思われる。

何であるかを十分に知られていないが、魅力的にみえる場所で教育を展開するという事は、結果の予測がつかない不安を伴う。しかし、その場所は、わからないがゆえに五感を澄ませて感じ取るという姿勢、問いかけ知ろうとする姿勢、すなわち「場所から学ぶ」という姿勢を喚起する力を秘めている。私たちは「場所から学ぶ」という基本方針を実践するために以下4つのことに取り組んだ。

第1に、実務的な取り組み。現在使用されていないばかりでなく、一般に貸出もされていない建物を教育の場に提供してもらえるように関係者と交渉することである。建物を管理しているのは亀岡商工会議所であった。古い建物をアートと教育の場にしたいという要望に最初は驚かれたようだが、企画書を提出し説明を重ねるうちに理解が得られ、関係者のご厚意とご尽力によって展覧会が実現する運びとなった。⁽⁷⁾

第2に、亀岡商工会館の歴史を詳しく調べることである。藤阪講師と岡崎は、亀岡商工会議所、亀岡市文化資料館、建築士の松井哲哉氏の協力のもと、文献資料調査と関係者への聞き取り調査によってこの建物と場所の

歴史をかなり詳細に把握するに至った。こうした調査も時間的に可能であれば授業の一環として学生に取り組みせればよいのだが、今回はその余裕がなかったので、私たちが調べた情報を学生に提供したり、松井氏に現場で講義していただくことでその代わりとした。

第3に、これが最も重要であるが、場所につながった作品を創ることを展覧会の基本方針にしたことである。「美・社会の感性と創造力を培う」という抽象的な教育目標は、創作活動を通じて「場所から学ぶ」ことで、地(域)に足のついた教育実践として具体化される。

第4に、展覧会を契機に近隣の市民や地域社会とのネットワークをつなぐことである。うまくいけば、学生たちは展覧会が社会的なネットワークを創出すること、美を媒介とした社会的なつながりが展覧会の基本要素であることを体験の中で学ぶことができる。

3. 「場所の美と感性」の体験型学習

以下、授業内容を順をおって述べていこう⁽⁸⁾。

第1回の授業(10月1日)では、授業の目的・概要・進め方を説明し、藤阪講師の作品を紹介した。「場所」を基本テーマに亀岡商工会館で展覧会を開催する予定であること、藤阪講師、岡崎、アーティスト数名が出品する予定であることも説明した。受講者にはこの授業を履修した理由を話してもらった。2010年度秋学期の「アートギャラリー実習Ⅱ」を受講したのは、人間文化学部2回生の村田郁恵さんと宮平俊也君の2名である。村田さんは同年春学期に開講された「アートギャラリー実習Ⅰ」を履修し、レンタルギャラリーでの写真展覧会を経験していた。このときはモノクロの写真作品を1枚発表しただけだったので、より多くの作品を創って展示したいという思いをいだいてこの授業を履修したのだという。宮平君は沖縄国際大学からの国内留学で1年間本学に在籍している。彼は「アートギャラリー実習Ⅰ」を履修していなかったが、バンドでアルバムを制作した経

験があり、最近ではフリーペーパーを自主制作するなど、創作活動に意欲的な学生である。この授業はシラバスを読んで「何か新しい経験ができそうだ」と思って受講したという。今年度は履修者の数は少ないが、創作意欲の⁽⁹⁾高い学生が集まったといえる。私たちは学生の個性や能力にあわせて授業を進めることとした。

第2回目の授業(10月8日)では、現代アートの多様な表現を紹介した後、創作ワークショップを行った。学生には「付箋紙を使って自由に作品を創る」という課題が提示された。そのねらいは限定された条件のもとで多様な表現の可能性を探ることにある。一般に美術といえば、絵画、彫刻、写真などがイメージされるが、日常的な事物も「美術作品」となりうる。付箋紙を素材とした場合でも、一定間隔でたくさん並べたり、かたまりで配置したり、机に張ったり、床や壁に張ったりと、さまざまな表現が可能であり、それぞれに固有の美的なテイスト(味わい)がある。そして、美的に味わうことのできるものすべてが「美術作品」なのである。

学生たちは「なぜこれを創ったのか」を言葉で説明することが求められた。ただし、作品は単純な論理ではとらえきれない過剰を示すから、その語りには重層的な言語が求められる。藤阪講師は、付箋を「美的なもの」たらしめた感性を言語化することを重視する一方、言葉できれいに解釈できてしまうものはおもしろみがないとコメントを加えた。学生の説明を出発点对話を続けるうちに、作者が気づかなかった面白みが指摘されたり、予想外の解釈が与えられたりした。作者と鑑賞者のコミュニケーションのなかで新たなコンテクストがつくられると、作品に新たな意味が生じ、その見え方が変わってきた。こうして、美は実体ではなく、関係の中で成立することが実感されることになった。宮平君は後にこのワークショップが「革命的で、強烈だった」と語っている。

第3回目の授業(10月15日)では、大学の周辺地域をフィールドワークした。展覧会に出品予定である美術家の吉澤充子氏も同行した。出品者には、展示の場所や地域につながった作品を創ることが求められていたが、まず

は自分の足で歩き、地域の地形や風景、色や音や匂いを体感する必要があった。参加者には、フィールドワークの途中で気付いたことや思い浮かんだアイデアはすべてノートに書いたり、写真に撮ったりして記録に残すことが求められた。一行は大学を出発し、亀岡市を一望できる安行山(西山)に登った。山の展望台からは、遠くに保津川がゆったりと流れ、ほとりに亀岡商工会館がぼつんと立っているのがみえた。それが作品が置かれる場所であった。この地域を俯瞰できる山に登ったことは、亀岡の場所感覚を培ううえで重要な意義をもった。一行は、山麓の磐栄稲荷宮に立ち寄って山を下り、繁華街をとってJR亀岡駅まで歩いた。全部で2時間ほどの行程であった。

第4回目(10月22日)の授業では、フィールドワークの経験をもとに構想した作品プランを発表することが求められた。学生たちは会場となる亀岡商工会館の概略について説明を受けていたが、まだ自分の目では見ていなかった。それゆえ、まずは自分の中から湧き上がったイメージをふくらます形でスケッチを描いたようである。その構想から、村田さんが写真を素材とした作品を、宮平君がオブジェをインスタレーションする作品を創りたいというビジョンをいただいていることがわかった。学生たちは、自分が何を表現しようとしているのかを言語化し、どのような方法を使えばそれを現実できるかを熟考するよう求められた。

第5回目(11月5日)の授業は、展覧会の出品予定者でもある建築士の松井哲哉氏(一級建築士事務所UZU)をゲストに招き、亀岡商工会館の場所の特性と建物の歴史について講義してもらった。松井氏は亀岡で生まれ育ち、現在は関西一円の仕事をしているが、JR亀岡駅の改築に関わるなど亀岡市の都市景観にも積極的に取り組んでいる。松井氏は、亀岡商工会館は古くからの村々がある地域と住宅街として新しく発展してきた地域との中間地点に所在すること、4階建てのコンクリート建築が建てられた当時は保津川下りの拠点となる観光施設であったこと、長い労働争議の後、経営者の阪急電鉄が撤退し、船頭の組合が別会社をつくって川下で営業を始めた



写真2 12月5日の清掃の様子(亀岡商工会館, 撮影:松井哲哉)

こと、1972年に建物の所有権を亀岡商工会が買い取り、改装工事の後、「亀岡商工会館」が完成したことなどを話された。現場講義の後は保津川下りの船を制作・修理している工場に案内して下さった。

第6回目(11月12日)の授業では、学生たちに第2段階の作品プランを発表させた。しかしまだ構想がかたまっていない様子であったので、第7回目(11月19日)の授業でもう一度亀岡商工会館に出向いて、現場で構想を練りあげることにした。展示場所をスケッチしたり、寸法を測ったりして、どこに何を配置するかを、現場を体感しながらできるだけ具体的に考えるようにと指導した。第8回目(12月3日)の授業では、制作中の作品と設置図を示して、最終段階のプランについてプレゼンテーションすることが求められた。さらに対話と議論が重ねられて、素材や色、配置が厳密に検討された。

第9回目(12月5日)は学生と出品者で会場の清掃を行った(写真2)。展覧会で使用する予定の部屋には、埃やゴミの積もった部屋、物が乱雑に積まれた部屋、いつから使われていないのかわからないほど汚れた部屋が含まれていた。そこは美を鑑賞したり、語ったりできる場所とは言い難かった。そこで、私たちは大量のゴミを捨て、床を拭き、窓を磨き、午前10時半か

ら午後4時頃までかけて、場所を文字どおり「美化」する活動にいそしんだ。これは相当に骨の折れる作業であったが、予想外の収穫もあった。展示スペースを自分たちの手を使って掃除するうちに、床の質感から壁のはがれ具合に至るまで、空間の特徴を具体的に把握できるようになったのである。私たちは、掃除をとおして、最初は縁もゆかりもないように思われた建物に愛着を感じるようになっていた。古く汚れた建物でも掃除や手入れをして大切に扱おうと、古びた雰囲気が美的な味わいを醸し始め、色のはがれた部分や染みが場所の個性のようにみえてきた。掃除の一日は「場所の美と感性」とは何かをより深く考えさせる時間となった。

第10回目(12月11日)は、10時から5時頃までかけて、会場に作品を搬入し、設置する作業を行った。展示会の前日の第11回目(12月16日)には、作品設置の最終作業と会場整備を行った。

展示会は「亀岡プロジェクト2010 場所の美と感性」と題され、12月17日～19日に開催された。12月23日の授業では祝日の一日を使って片付けと搬出作業を行い、終了後に反省会を行った。翌年1月にはレポートの提出が求められ、一連の取り組みが報告書にまとめられた。⁽¹¹⁾

4. 展示会と作品——「亀岡プロジェクト2010」

では、「場所から学ぶ」ことで創られた作品を紹介しよう。

宮平俊也君の作品「蛾」は、銀杏の葉と古い蛍光灯を使ったインスタレーション作品である(写真3)。作品は階段横のスペースの一角にまるで吹き溜まりのように配置され、注意しないとこれが作品であることを忘れてしまうほど、ひっそりと寂しい場に溶け込んでいる。その存在感はこの建物の在り方を象徴しているように思える。よく見ると、銀杏の葉にペインティングを施し造形された蛾のオブジェが紛れ込んでいる。銀杏の吹き溜まりからは安物のラジオのように割れた音でかすかに音楽が鳴っているのが聞こえる(携帯電話の音楽再生機能を使用している)。



写真3 宮平俊也「蛾」(撮影：岡崎宏樹)



写真4 村田郁恵「うつりかわり」
(撮影：松井哲哉)

注目したいのは「蛾」というタイトルである。この古い建物には華やかな蝶よりも、濁った色の蛾の方が似つかわしい。しかし彼はこのタイトルにもうひとつの「ガ」を重ね合わせた。この建物がかつて労働争議の場となった歴史をふまえ、ここをかつて「我と私の張り合い」のあった古戦場ととらえたのである。枯れた銀杏を集めてハート型に配置しているが、それはもしかしたらありえたかもしれない和解のイメージを表象しているようにみえる。壊れた蛍光灯は人びとを明るく照らしたかもしれない可能性を象徴しているかのようなのである。そうだとすれば、ここでかすか

に鳴り響く音楽に耳を澄ますことは、実現しなかったこの建物をめぐる歴史の可能性に耳を澄ますことにほかならないだろう。

村田郁恵さんの「うつりかわり」は写真を素材としたインスタレーション作品である。展示のための部屋は、特異な台形の空間で、窓が大きく明るいが、中央には大きな柱が通っていた。また壁が白い分、色のはがれた部分や染みが目立っていた。彼女の一番の課題は、与えられた展示空間と自分の中の作品のイメージをいかに調和させて具体化するかという点にあった。彼女は藤阪講師と現場で長時間かけて話し合いながら創作を進め、

写真作品を配置していった。白い壁には、四季の「うつりかわり」を表すように、各季節をシンボライズする写真が右から左へと順に配置された。壁の向かい側のスペースにも同様に四季を表す写真が窓枠部分に配置された(写真4)。窓枠の作品群は透過素材の写真を鏡の上に張って創られているため、メタリックな質感が窓枠のアルミの質感と見事に調和していた。それゆえ、個々の写真が作品なのではなく、写真が張られた窓枠全体が一個の作品にみえた。時刻によって窓から入る光が「うつりかわる」ので、作品は夕方には夕方の、夜には夜の表情を見せていた。日が沈むと窓枠が、対面の壁作品や鑑賞者を含んだ空間を映し込んだ。殺風景な空き部屋だった場所は、空間の個性を活かした美的配置によって、見違えるほど華やかな空間に変化していた。



写真5 藤阪新吾「窓」
(撮影：向井佐弥子)

会場には学生の作品とともに藤阪講師、吉澤充子氏、松井哲哉氏、岡崎の作品も展示された。

藤阪講師は、長らく使われていなかった亀岡商工会館のネオンを点灯する「re-present」、屋上でみつけた隕石のような石を配置した「石は場景の空き地に降りる」、**「窓」**の3作品を発表した。

「窓」(写真5)は、建物3階の廊下を挟んだ2つの部屋の窓を開くことで表現されたインスタレーション作品である。鑑賞者は、開いた窓から入る冬の外気を体感しつつ四角の窓枠が遠近法的に重なる空間のおもしろさを味わうが、この作品が表すのはそれだけではない。北側の窓の外からは建物の傍に立つ希少なサイカチの大木がみえ、その向こうには古くからの集落が広がっている。反対の南側の窓からはJR亀岡駅がみえ、その向こ



写真6 岡崎宏樹「HOZ/H2O」
(撮影：岡崎宏樹)



写真7 吉澤充子「fieldworks」
(撮影：松井哲哉)

うには新しく開発された商業・住宅地域が広がっている。だから、両側の窓がみえる場所に立つということは亀岡の新旧両地域を結ぶ直線の中心に立つことを意味するのである。このように「窓」は亀岡商工会館が所在する場所の空間の意味をシンプルだが強烈な印象を与える方法で表現した作品である。

岡崎は4つの曲で構成されたサウンドアートを発表した(写真6)。亀岡商工会館の傍を流れる保津川の水เสียง、サイカチの大木を手で叩いた音、樹下に落ちている実や土を踏みしめた音、夕方のサイレン音、保津川下りの船をこぐ音、観光客の歓声など、「場所の

音」をレコーダーで録音採集し、これを素材にサウンドトラックの基礎を制作した。さらに、そのサウンドからイメージされたメロディやコードをキーボードで重ね合わせた。全体としては、タイトル「HOZ/H2O」が示すように、保津川の水音を意識させるサウンドとなっている。展示室はコンクリートに囲まれた部屋だったので、スピーカーから鳴らされた音楽は床・壁・天井に深く反響し、独特の音空間を構成した。

吉澤充子氏は階段横のスペースに複数の絵を飾った(写真7)。キャンバスに描かれた形象は航空写真に写された亀岡の地形や街並みを反映してい

るが、作品名の「fieldworks」が示すように、そのイメージは安行山のフィールドワークで展望台から亀岡を一望したときの印象につながっている。塗装が剥がれてくすんだ古い壁に馴染むよう、色調や形のバランスには十分な配慮がなされている。窓の景色も借景として作品の一部となって、この場所でしか味わうことのできない表現を構成している。こうして吉澤氏の「fieldworks」は、誰も気にとめなかった空きスペースを心地よく美しい空間に変えてしまったが、場所の特徴を活かしているため、まるでずっと昔からそこにあるような懐かしく優しい印象を鑑賞者に与えている。

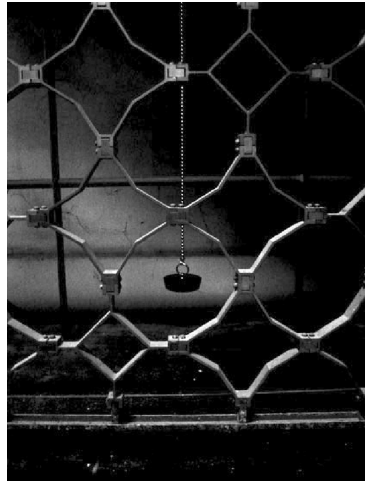


写真8 松井哲哉「開栓」
(撮影：松井哲哉)

松井哲哉氏は、建物の天井から床近くまで栓をつるし、天井には揺らぐ青色を映写した作品「開栓」を発表した。松井氏は、この地域に伝わる伝承と亀岡商工会館の現在とを結びつけて作品を構想した。伝承によれば、太古、亀岡の盆地は湖であったが、保津渓谷入口の流木の栓を焼き払って水を抜くことで平野が現れて田畑となった。保津の火祭りはその時の火が起源であるといわれる。現在、保津川周辺は人や物の動きが活発であるが、亀岡商工会館はその中心でまるで台風目のように沈黙している。再利用の議論もなく、なかば忘れられた建物は再び水没してしまったかのようなのである。この建物の意義を再認識すべきではないかと考えた松井氏は、屋上に落ちてきた「隕石」の刺激による「2度目の水抜き」をイメージして、この作品を創作している。⁽¹²⁾

5. おわりに ― 可能性と課題

各出品者は同じ場所をモチーフとしながらも、異なる発想とアプローチによって創作に取り組んだ。また、学生、教員、主婦、建築士など社会的役割の異なる出品者が、フィールドワークから清掃、広報、設置、片付けに至るまで、展覧会のためにさまざまな形で協働した。その意味で、作品群は「多様の統一」を、協働は「多趣の⁽¹³⁾一味」を示すものといえるかもしれない。

展覧会の最終日、片付けを終えた後、私たちは手伝ってくれた関係者とともに暗く寒い会場に残された一台のストーブを囲み、それぞれが振り返りと感謝の言葉を述べて展覧会を閉じた。私にはストーブの灯りにほの明るく照らされた空間、その分かち合いの時間も美的な「作品」のように感じられた。その実感をもとに言うならば、《展覧会》は展示作品の集合ではなく、創造的な芸術活動と創造的な社会活動の全体である。準備・制作・運営・対話・交渉・議論・交流・反省など、すべての創作的活動とその所産の総体が《展覧会》なのである。

このような観点に立つことで、美から社会を、社会から美を学ぶことをめざした「アートギャラリー実習」の可能性も明らかになる。それは美術作品の創作によって美的感性を養うだけでなく、展覧会に向けた協働を通じて創造性と社会性を育成する。授業担当者は概念的知識を教えこむことよりも、共に考え、対話し、協働するプロセスを重視して、学生の主体的な学びを促進する。学生には、地域の地理と場所の歴史を知ること、五感を使って空間を把握すること、それら全体的理解のもとに創作し表現すること、協働すること、そのすべてが求められる。よって、それは知性と感性、行為と思考の統合学習となりうる。

とはいえ、新たな取り組みであるから残された課題も多い。2010年度の授業は、作品の創作と展覧会の運営に多くを費したため、報告書の作成を

通じて学習内容を言語化する時間を十分に取ることができなかった。この授業の学問的バックグラウンドとなっている社会学と社会美学をもとに、美の社会性と社会の美学性について詳しく論じる余裕もなかった。半期の授業では時間的制約が厳しいとはいえ、スケジュールや授業運営については検討の余地がある。また、今年度は受講者の創作へのモチベーションが高く、人数が少なかったために密接な関わりの中で教育することができたが、受講者のやる気が薄い場合や人数が多い場合は別の授業運営を考えなければならないだろう。しかし、私たちが「場所」から作品を創ったように、教育もまた「現場」から創りあげていくほかない。今後も試行錯誤の中で知識と経験を重ねて、この教育の可能性を広げていきたい。

注

- (1) 社会学者デュルケームは社会にとっての理想の重要性について次のように述べている。「社会は理想を創造することなくしては構成され得ない。これらの理想はその発達に極点に到達しているときの社会生活を描写し要約している観念に他ならない」（デュルケーム、1985、「価値判断と現実判断」、佐々木交賢訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣：127頁）。
- (2) 本稿の作成にあたって、共同で授業を担当している藤阪氏には的確で触発的な助言をいただいた。
- (3) 我が国においては、宮原浩二郎氏が藤阪氏とともに「社会美学 social aesthetics」にかんする「理論的・体感的研究」を先進的に進めている。宮原氏によれば、社会美学とは「社会のもつ感性的・美的質を把握しようとする」ものであり、小社会に軸足を置きながら、その射程を全体社会にまで伸ばし、「事実認識にとどまらない規範的、倫理的、ユートピア的指向をもつ」（宮原浩二郎、2008、「社会美学のコンセプト(1)——理論的考察の展開」『関西学院大学社会学部紀要』106：34-35頁）。藤阪氏の社会美学の研究については以下を参照。藤阪新吾、2009、「鯨屋を味わう——ともにある食事の社会美学」『関西学院大学社会学部紀要』107、2009、「商店街の社会美学——美しい状況としての共的な空間について」『関西学院大学社会学部紀要』108、2010、「テーブルとしての社会——共(common)の認識に向けた社会美学の試み」『関西学院大学社会学部紀要』109。
- (4) 岡崎が京都学園大学で担当している音楽文化系科目は「ポップ・ミュージック論」「音楽とコミュニケーション」「京都の音」、社会学系の科目は「現代社会論」「理論社会学特論」などである。

- (5) 2010年12月18日、亀岡商工会館において、宮原浩二郎氏が「社会美について」と題した講演を行い、その後、宮原氏、松井哲哉氏、藤阪講師、岡崎の4名でトークセッションを行った。
- (6) 『京都新聞』朝刊(2010年12月19日)地域欄。京都新聞のホームページでも記事が掲載されている (<http://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20101219000036> : 2011年1月19日取得)。
- (7) 会場使用や資料や聞き取りでの調査に際して、多大なるご尽力をたまわった亀岡商工会議所の常務理事・西田廣道氏、中小企業相談所長・平田実氏にはこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。
- (8) 授業は半期の場合、90分の授業が15回で構成される。授業には長時間のフィールドワークや現場実習も含まれているので、必要や状況に応じて、1回を2コマ連続としたり、曜日時間を適宜変更するなどして授業を運営した。
- (9) これまでは10~20名の受講生があった。今回の授業が少人数となったのは、授業時間外の創作や展覧会期間の長時間参加が求められたからかもしれないが、たんに時間割上の理由かもしれない。
- (10) 設立登記には「1958(昭和33)年10月20日保津川遊船株式会社 代表取締役川本直水」という記載がある。
- (11) 報告書は2011年3月に完成する予定。ご希望の方には無料で郵送します(在庫には限りあり)。問い合わせ先は、〒621-8555 亀岡市曾我部町南条大谷1-1 京都学園大学人間文化学部 岡崎宏樹、電話0771-29-3606, e-mail: okazaki@kyotogakuen.ac.jp。
- (12) 松井哲哉氏のブログ記事参照 (<http://blog.uzu-a.com/?cid=23899> : 2011年1月19日取得)。
- (13) 思想家で社会活動家の石川三四郎は、多様な趣きをもつ多様な人々(=多趣)が相互に協働してまとまる(=一味)ような「社会」の美を「多趣一味」と呼び、独自の「社会美」の観点からこれを論じた。石川の「社会美」については、前出、宮原浩二郎、2008、「社会美学のコンセプト(1)——理論的考察の展開」を参照。